

GROWING PAINS WK 5(成長の痛み 第5週)
ACTS 7:54-8:3(使徒の働き 7章54節～8章3節)

INTRO(イントロ)

2012年、テキサス州オースティンにある「オースティン・ストーン」という教会が、世界中に宣教師を送り出そうという大きな運動を始めました。宣教に力を入れた結果、彼らは100人以上の人々を、他の国々で福音を伝えるために送り出したんです。その送り出された人たちの中に、ロニーとアニタというスミス夫妻がいました。スミス夫妻はリビアのベンガジという街に降り立ち、ロニーはベンガジ国際学校で化学の教師を始めました。そこでは福音を伝えることは違法とされていたため、ロニーは普通の教会の壁の外側で、人々にイエス様を示すあらゆる機会を見つけては用いていたんです。時が流れて2013年のクリスマス。アニタと幼い息子のホセアは、休暇のために一足早くアメリカの帰途についていました。ロニーも生徒たちの期末試験が終わったら、すぐに後を追う予定だったんです。そんなある日、彼がジョギングをしていると、黒いジープが近づいてきて、噂に聞くアメリカ人とはお前のことかと尋ねてきました。短い会話の後、ジープは一度去っていきましたが、すぐに引き返してきて、ロニーの胸に向けて6発の銃弾を放ったのです。

この事件の少し前、ロニーはある牧師の友人と会話をしていて、「その国(リビア)の状況は、もう滞在するには危険すぎるほど悪化しているんじゃないか？」と尋ねられていました。ロニーはこう答えていたんです。「ここは我が家のように感じられるんだ.....文字通り、地球上で僕たちがここにいる以上にいたい場所なんて、他にはどこにもないよ。どこにもね」

事件からわずか数日後、アニタは、信仰によって「赦しよりも復讐」が奨励されるその国で、アラビア語で広く放映されたインタビューを通して、犯人たちへの赦しを表明しました。それから10年後のインタビューで、彼女は、ロニーの死をきっかけにキリストのもとに導かれた人々がリビアにいるということについて語ってくれました。

TENSION(テンション)

私たちのほとんどにとって、これは身近に起こるような話ではないかもしれませんが、でも、今の私たちの世界では、多くの人が信仰のために命を捧げています。サブサハラ(サハラ砂漠以南)のアフリカでは、2時間に1人の割合でクリスチャンが殺害されており、その

大半はナイジェリアで起きています。これは大昔の数字ではなく、2025年のデータなんです。現代でも、人々は今なお自分の信仰のために命を落としています。

しかし、これほどの迫害があるにもかかわらず、この地域ではキリスト教が成長しているんです。実際、IMB(国際宣教委員会)は現地の教会やクリスチャンと協力して、アフリカだけでなく世界中に宣教師を送り出しています。なぜそんなことが可能なのでしょうか？なぜなら、霊的な成長ということに目を向けるとき、痛みや迫害こそが、しばしば福音を最も速く加速させる燃料になるからです！

ここアメリカでは、教会全体が衰退しつつあります。迫害や死の恐怖を感じることなく自由に礼拝できる国であるにもかかわらず、キリストの従い手を自認する人々の数は毎年減少しています。多くの人が信仰から離れていってしまいました。それは、信仰のコスト(代価)が高すぎたからではなく、むしろ低すぎたからです。私たちは、平穏や快適さこそが成長の余地を生み出すと考えがちです。でも実際には、成長をもたらすのは「痛み」なのです。教会の成長において、痛みや迫害は、燃え盛る炎にガソリンを注ぐようなものです。

そして、そのことが私たちをこの使徒言行録7章の物語へと導きます。ここまでは、教会は成長を続けていました。確かに使徒たちはいくつかの困難に直面していましたが、ここで私たちは「最初の殉教者」を目にすることになります。それは使徒ではなく、ほんの一章前で、教会のミニストリー(奉仕)の仕事を管理するために任命されたばかりの人でした。それなのに、この一人の信徒が、教会のメンバーが、自分が信じるもののために、そしてイエスの名のために、喜んで命を捨てようとしているのです。私たちがこの物語を見つめるとき、一つの真実が浮かび上がってきます。それは、「神の民が苦しみを永遠という視点(レンズ)を通して見るとき、福音の成長が起こる」ということです。

PRAY/TRUTH(祈り／御言葉の真理)

Acts 7:54-8:3(使徒の働き 7章54節～8章3節)

54 人々これを聞きて、心に深く怒り、彼にむかいて歯がみした。

おそらくヘレニスト(ギリシャ語を話す)ユダヤ人であったステパノは、自分たちこそが最高に清い存在だと自負しているサンヘドリン(最高法院)の前に立ち、イスラエルの国の歴史を語りました。そして、神様を独占していると思い込んでいるこの宗教家たちの過ちを厳しく指摘したのです。彼は「神は人間の手で建てられた神殿に閉じ込められるような方ではない」と告げました。すると彼らは、完全に理性を失ってしまったのです！物語はさらに続きます。

55 しかし、彼は聖霊に満たされ、天を見つめていると、神の栄光が見え、またイエスが神の右に立っておられるのが見えた。**56** そこで、彼は言った、「見よ、天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」。

ここで、イエス様が神の右に「座って」いるのではなく、「立って」いるのをステパノが見たというのは、本当に興味深いことだと思いませんか？なぜでしょう？聖書のほとんどの場所では、イエス様は神の右の座に着いておられると書かれています。でもここでは、まるで私たちが愛する人を家に迎えるときのように、イエス様はステパノを我が家へと迎え入れ、永遠の場所へと歓迎するために立っておられたのかもしれませんが。あるいは、ご自身の名のために命を捧げようとしている彼に、敬意と栄誉を示されていたのかもしれませんが。「主の聖徒たちの死は主の目に尊い」ということを、ステパノに伝えておられたのでしょう。

そしてステパノは、イエス様のことを「人の子」と呼びます。新約聖書の中で、イエス様ご自身以外でこの呼び方をしたのは、実はステパノだけです。彼は、自分の罪のために死んでくださった救い主、今まさにその方のために命を捨てようとしているキリストの、あの人間としての姿(人性)を見つめているのです。さらに続きます。

57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉に彼を目がけて殺到し、**58** 彼を市外に引き出して、石で打った。その時、証人たちは、自分の上着をサウロという若者の足もとに置いた。(これが使徒言行録におけるサウロの最初の登場です。)**59** こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、「主イエスよ、私の霊をお受けください」。**60** そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないでください」。こう言って、彼は眠りについた。

もし私が、激しく石を投げつけられて亡くなった人の最期を説明するとしたら、それを「眠りについた」と表現するかどうかは分かりません。しかし聖書では、この比喻が何度も使われます。なぜなら、いつの日か私たちの体は復活するからです。キリストに従う者に

とって、死とは肉体の一時的な状態にすぎません。だからこそ、殉教の死であっても、ステパノはただ「眠りについた」だけだったのです！

8:1 サウロも、彼の殺害に賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散らされていった。**2** 信仰深い人たちがステパノを葬り、彼のために胸を打って、大いに泣き悲しんだ。

ステパノにとって、なんと素晴らしい信仰の証でしょう。イエス様を愛し、イエス様を追い求めていた人たちは、ステパノを深く愛し、彼が亡くなったときには心を引き裂かれる思いで悲しみました。私たちはどうでしょうか。イエス様を愛する人たちから、同じように愛されていると言えるでしょうか？

3 しかし、サウロは教会を荒らし、家々に押し入って、男も女も引きずり出し、次々に獄に送った。

イエス様、あなたの御言葉を読む特権をありがとうございます！なんて強烈で、凄まじいストーリーでしょう。ルカが描写するサンヘドリンやサウロの怒りは、福音の真理と初期の教会に対するものでした。自分たちの間違いを指摘され、メシア(救い主)を見逃したと言われることへの激しい憎しみが伝わってきます。その一方で、自分の信じるもののために石を投げつけられ、殺されていくステパノの心の静けさはどうでしょう。彼の言葉を聞くまいと耳をふさぐ人たちのために、赦しを祈ることができるその姿。本当に信じられないほど素晴らしいものです。

この箇所を「教会の成長の痛み」という視点から学んだとき、私の心に留まったことが2つあります。まず皆さんに見ていただきたい1つ目のポイントは、「痛みを伴う迫害」です。イエス様は、山上の垂訓を語られたときに、すでにこのような迫害について警告されていました。こちらを見てみましょう。

マタイによる福音書 5章10～12節

10 義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。**11** わたしのために人々があなたがたを罵り、迫害し、偽ってあなたがたのあらせん限りの悪口を言うときは、あなたがたは、さいわいである。**12** 喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。

ステパノはその激しい怒りと憎しみをその身に受けました。大人の男たちが、まるで子供のように耳に指を突っ込んで彼の言葉を聞くまいとする姿を目の当たりにし、最終的には暴徒と化した群衆の怒りをその身に浴びたのです。これは法に則った死刑執行ではありません。怒り狂った暴徒たちが、一人の命を奪ったのです。

しかし、その迫害の痛みは教会全体へと広がっていきます。ここで人々のコートを預かっていたサウロ(これが、彼がこの暴動を先導していた象徴だと考える人もいます)は、この光景に勢いづき、エルサレムの教会を迫害し始めました。それによってクリスチャンたちは家を失い、あちこちの地方へと散らされていったのです。それでも、これほどの迫害、これほどの痛みを通して、教会は成長していきました。覚えているでしょうか、使徒言行録の1章で、イエス様は教会に対して「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地のはてまで」出て行きなさいと命じられました。そして今、この8章において、彼らはエルサレムから「ユダヤとサマリア」へと広がっていったのです。

では、アメリカのクリスチャンである私たちは、ここから何を学び取るべきなのでしょう？正直に言いますが、私はここで少し考え込んでしまいました。「自分はここから何を学べばいいんだろう？」と。そんな中で、私の心に深く響いたいくつかのポイントを分かち合いたいと思います。

まず、「クリスチャン生活のゴールは、快適さ(コンフォート)であってはならない」ということです。

私たちは、誰かが福音に対して気分を害するのを恐れるあまり、自分の語りたい言葉をどれほど薄めてしまっているでしょうか。「イエス様のために立ち上がる」ことよりも、「周りにうまく馴染む」ことの方が大切だと、いつの間にか決めてしまっていないですか？近所のパーティーや職場、親族の集まり、あるいは我が家の食卓でさえ、その場の空気を気まぐしくしたくないという理由で、自分の信仰の確信を薄めてしまっていないでしょうか。私たちが直面している危険は、「石を投げつけられること」ではありません。本当に危ないのは、「快適さと引き換えに、自分の信仰を差し出してしまうこと」なのです。イエス様が言われたこの言葉を思い出してください。

ルカによる福音書 9章23節

それから、みんなの者に言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。

次に、「福音への抵抗に驚いてはならない」ということです。

イエス様に従うということは、決して世間から大人気になったり、すんなり受け入れられたりすることはないのだと気づいてください。私たちが福音を伝えるとき、それは素晴らしいインパクトをもたらす一方で、多大なコスト(代価)を伴うこともあります。人々は、自分が「罪人」であり、「救い主」を必要としていると言われるのを嫌うものです。特に私たちは、人々が「自分には必要なものなんてほとんどない」と思い込んでいるような場所に生きています。だからこそ、福音への抵抗に直面するのは当然なのです。パウロはテモテに、信心深く生きようとする者はみな迫害を受けると語りました。でも、ここからが私の大好きなところですよ。私の大好きな聖書の一節を一緒に見てみましょう。

ヤコブの手紙 1章2～4節

わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをこの上もない喜びと思いなさい。3 あなたがたの知っているとおりに、信仰が試されることによって、忍耐が引き起こされるからである。4 だから、いちずに忍耐し続けなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、完全な、でき上がった人になるであろう。

もし私がイエス様を追い求めているなら、この「抵抗」は真理への忍耐(堅忍)を生み出し、キリストにあって私を完成へと導いてくれます。「自分にはあれが足りない、これが足りない」と愚痴をこぼすのではなく、「神様がこの私を造り変えてくださっているんだ」と確信して、この迫害(試練)に向き合うことができるのです。そして最後の1つ。

「痛みは、自分が本当に信じているものを明らかにする」ということです。

もしイエス様に従うことで、自分が大切にしているもの——たとえば、自分の評判、人間関係、仕事、あるいは経済的な安定——そういったものを失うとしたら、それでも私たちは信じ続けるのでしょうか？ 迫害を受けるということは、私たちの内側にあるものをこれ以上ないほど露わにします。ペテロのことを思い出してみてください。「主よ、あなたを絶対に否定しません」と言ったわずか3時間後、彼はイエス様を完全に否定してしまいました。一度や二度ではなく、三度もです。でも、神様は彼を見捨てられませんでした。その同じ男が、ほんの数ヶ月後には大胆に福音を語り、一度に3,000人もの人々がキリストのも

とに導かれたのです。迫害の中で失敗したという「痛み」が、ペテロの弱さを強め、彼がキリストのために堂々と立てるようにしたのです。

もしかしたら今日、あなたは迫害を感じていたり、苦しみの中にあったりするかもしれません。そんなあなたに、「その苦しみが無駄にしないで」と励まさせてもらえませんか？あなたの受けている迫害が、福音をさらに前進させることになるかもしれません。パウロはピリピの教会への手紙の中で、自分の苦しみがまさにそのように用いられたことへの感謝を伝えています。あるいは、あなたが今苦しんでいるのは、同じような苦しみに直面している他の誰かを励ますため、ということだってあるのです。こちらを見てみましょう。

コリント人への第二の手紙 1章3～4節

ほむべきかな、私たちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、すべての慰めの神。4 神は、いかなる患難の中にも私たちを慰めてくださり、神から受ける慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を私たち自身が慰めることができるようにしてくださるのである。

苦しみを無駄にしないでください！

この箇所で、私の心にもう一つ強く残ったポイントがあります。それは、「成長をもたらした視点（パースペクティブ）」です。もう一度、55節に戻ってみましょう。

しかし、彼は聖霊に満たされ、天を見つめていると、神の栄光が見え、またイエスが神の右に立っておられるのが見えた。

迫害の中にあっても、ステパノはイエス様から目を離しませんでした。ただ頭を下げ、じっと耐え忍んでいたわけではありません。イエス様を見つめ続けていたのです。この一時的な痛みは、彼がまさに体験しようとしていた永遠の栄光に比べれば、何でもありませんでした。この「永遠の視点」こそが、ステパノのすべてを形作っていたのです。だからこそ、彼は神の栄光を見ることができました。自分を憎む者たちから投げつけられた岩が体を打ちつけ、ひざまずいたあの瞬間にも、彼らを赦してくださいと神様に願うことができたのです。物語がどんな結末を迎えるかを知っていると、苦難の章の見え方そのものがガラリと変わります！パウロが書いたこの言葉を思い出してください。

コリント人への第二の手紙 4章17節

なぜなら、このしばらくの軽い患難は、くらべものにならないほど重い、永遠の栄光を、私たちにもたらすからである。

迫害があなたの身に降りかかるとき、自分から「何が奪われようとしているか」ではなく、自分のために「何が待っているか」に目を向けてください！

そしてこの後、迫害はさらに激しさを増していきます。しかし、そこにはイエス様にしっかりと目を留めた人たちが大勢いました。この「散らされること」は福音を押しつづすどころか、むしろ世界へと広げていったのです！痛みが宣教を止めたのではありません。痛みこそが、宣教を成長させたのです！

それこそが、今でも私たちが目にしているパターンです。ロニー・スミスの血は、リビアでの福音を沈黙させることはできませんでした。妻のアニタ自身が、彼の死をきっかけにキリストのもとに導かれた人たちがいると語っています。ナイジェリアで迫害されている教会も、その圧力に屈して縮小してはいません。世界で最も急速に成長している教会運動の一つとなっているのです。「永遠」というレンズを通して見るとき、痛みは神の国を減らす（引き算する）ものではありません。それを何倍にも増やす（掛け算する）ものなのです。

そこで質問です。このような苦しみのカテゴリーがほとんど存在しない文化に生きる私たちにとって、私たちの視線はどこに向いているのでしょうか？私たちは一時的な快適さに目を奪われているのでしょうか、それとも天を見つめているのでしょうか？もし私たちが「快適さ」を求める教会になってしまったら、その快適さが脅かされたときに縮んでいってしまいます。しかし、もし私たちがイエス様と永遠のことに目を留め続けるなら、私たちは自分の快適さや仕事、家、あるいは命にさえ執着しなくなります。なぜなら、この世にある何ものも、私たちの前に用意されているものとは比べものにならないからです！

アメリカの教会の一部でありながら、この世のものに目を奪われずにいるのは簡単なことではありません。でも今日、私はあなたにこう励ましたいのです。これらすべてのものから目を離し、聖霊に満たされて、私たちを我が家へと迎えようとしてくださる、よみがえりのキリストを見つめようではありませんか！私たちがイエス様のために立ち上がるとき、主は立ち上がり、私たちに声援を送ってくださっています！私たちがもっとステパノのようになれますように。彼は選択肢が尽きたから死を受け入れたのではありません。自分がすでに勝利していることを知っていたからこそ、喜んで命を捧げたのです！そして、その視点（パースペクティブ）こそが、「成長の痛み」を「福音の成長」へと変えるのです。

今日読んだ物語は、多くの人にとって現実味がなく、遠い世界の話に思えるかもしれません。この部屋にいる誰かが、自分の信じるもののために死刑に処される可能性は極めて低いでしょう。しかし、何が起こったか(WHAT)に注目するのではなく、なぜそれが起こったか(WHY)に目を向けるよう、皆さんにチャレンジさせてください。それが起こったのは、ステパノが「イエス様が誰であるか」を知っており、他の人々にもイエス様を知ってほしいと願っていたからです。彼は自分に救い主が必要であることを理解していました。そして、他の人々に主を知ってもらうことに比べれば、自分の命など何でもないと分かっていたのです。彼は、自分の罪のためにイエス様が死んでくださったことを理解していました。イエス様がその死と復活を通してご自身のために成し遂げてくださったことを、心から喜んでいました。彼には、生きる理由だけでなく、死ぬ理由もありました。そしてもしかしたら今日、あなたにも「生きる理由」が必要なのかもしれません。その理由こそが、イエス様です。